

生活事態変化に伴う孤独感

諸井 克英

1. 問題

Cutrona(1982)は、大学新入生の孤独感について約半年にわたって測定し、時間の経過とともに孤独感が低減することを見出した。この新入生の孤独感の高まりと低減傾向は、孤独感が、状況に主として規定される一過的な事態特性成分と、状況の影響を被りにくい慢性的な個体特性成分をともに含んでいることを示唆している(諸井,1986)。

Cutrona(1982)は、新入生の居住環境にかかわらず孤独感の低減傾向が起こると報告している。しかし、諸井(1986)は、居住環境の影響が生じる可能性を提起している。つまり、アパート、下宿、および寮から大学に通学する新入生は、自宅通学の新入生と比べて次の点で異なる生活事態変化に直面する。自宅通学者は、家族関係を含め入学前に形成されていたネットワークを維持しながら、大学生活への適応を試みることができる。一方、非自宅通学者は、家族関係や入学以前のネットワークを一応断って、大学をも含めた生活事態全体への適応に迫られる。つまり、非自宅通学者では、事態の連続性が低いと思われる。したがって、非自宅通学者のほうに、孤独感の事態特性成分の高まりがみられ、新たな生活事態での社会的ネットワークの形成とともに、孤独感の低減が起こるはずである。この可能性を検証するために、諸井(1986)は、大学新入生の4月から7月にかけての孤独感の変化を、社会的ネットワークの状態とあわせて調べた。その結果、非自宅通学者でのみ、孤独感の低減傾向が認められ、新たな社会的ネットワークの活発な形成がみられた。

しかし、諸井(1986)の研究について、a)孤独感尺度の評定基準、b)測定の期間、c)対照群の欠如、d)非自宅通学者の分類、および e)男女差、という問題点を指摘できる。

a)の問題は、孤独感の一過的な事態特性成分と慢性的な個体特性成分との区別に関連している。諸井(1986)が用いた改訂UCLA孤独感尺度では(Russell

et al.,1980), 孤独・非孤独状態を表わす20項目のそれぞれに対して“日ごろ”という基準で評定させる。もしも孤独感の2成分が存在するならば, 評定の時間的範囲が曖昧な基準を用いると, 被験者が恣意的に設定した範囲によってどちらの成分がより反映されるかが左右されることになる。生活事態変化に伴う孤独感を検討する際には, とりわけ, これら2成分の区別は重要である。

次に, b)について述べる。諸井(1986)が行った4月から7月にかけての時期は, 新入生の大学生活への適応にとって重要な時期と考えられる。しかし, Cutrona(1982)が認めた半年の間の急激な孤独感の低減と比べると, 下宿者の孤独感の低減の程度は小さい。Hays & Oxley(1986)は, 大学新入生の社会的ネットワークの変化を4ヵ月にわたって検討し, 自宅通学者と大学寮居住者との比較を行った。自宅通学者は, 大学生活での同輩との交友が希薄である傾向があった。したがって, 自宅通学者は, 大学生活への移行初期には, 家族関係や入学以前のネットワークが維持される分だけ有利である反面, 大学生活の中での交友形成の遅滞によって, 後に孤独に陥ることもあると思われる。このように考えると, 入学から最初の夏休みまでの調査だけでは不十分であり, 夏休み以降の孤独感の変動がどのようになるのかも探る必要があるだろう。

c)の問題は, 諸井(1986)の研究では, 新入生のみが対象とされ, 一応大学生活への初期適応期を通過した2年次以降の学生のデータに欠けるということである。たとえば, 2・3年生の孤独感, は, 慢性的な個体特性成分を強く反映し, あまり時間的变化を示さないと考えられる。また, 4年生は, 大学生活からの離脱と実社会参加のための準備期にあるといえ, 孤独感の高まりにさらされるかもしれない。

d)に関しては, 諸井(1986)が対象とした集団では大学寮居住者が少数($N=6$)であったために, 自宅通学者以外を下宿群として一括して分析した。諸井(1986)の考えを拡大すると, アパートや下宿に居住する者と大学寮居住者では, 新たな社会的ネットワークの形成の点で異なる条件にあることになる。つまり, 大学寮では, 自分と同様に生活事態変化に直面した多数の新入生との共同生活を始める。そのため, さまざまな不確定な出来事がもたらす不安を同輩との社会的比較によって解消できる。さらに, 上級生の存在は, 大学生活での準拠枠を提供すると思われる。したがって, 物理的に孤立した居住形式である下宿者よりも, 大学寮居住者のほうが大学生活に円滑に適応できると推測できる。Ross(1979,Cutrona(1982)による)の研究では, 大学寮生よりも下宿者のほうの孤独感が高いことが見出されている。また, 先述のHays & Oxley

(1986)の研究でも、自宅生よりも大学寮生のほうで社会的ネットワークの形成が活発であった。これらの知見は、大学寮生の孤独感変化に関する検討の必要性を示唆している。

最後に、e)について述べる。諸井(1986)の研究では、女子については、被験者の少なさもあり、有意な居住環境の効果が得られなかった。Borys & Perlman(1985)によれば、男子のほうが、性役割上、情動的弱さや苦悩の表明が許されないので、孤独状態に陥りやすい(諸井,1987 参照)。また、高校生(諸井,1985)や大学生(諸井,1987,1989b,1990)を対象とした研究で、女子よりも男子の孤独感が高いことが見出されている。したがって、女子のほうが、新たな生活事態への適応過程において生じるさまざまな問題にうまく対処していく可能性がある。Shaver *et al.*(1985)は、大学入学前と入学後半年間の孤独感と社会的ネットワークの状態を測定し、女子に比べ男子のほうで入学による孤独感の高まりと社会的ネットワークの悪化が生じることを報告している。また、先述のHays & Oxley(1986)も、男子よりも女子のほうが社会的ネットワークから受ける支援の状態が良好であることを見出している。

本稿では、これらの問題に関わる2つの調査を報告する。調査Aは、e)の問題に関わるものであり、諸井(1986)の研究と同時に高校生を対象として実施された。調査Bは、諸井(1986)の研究や調査A、さらには予備調査(諸井, 1989 a,b 参照)を踏まえて行った試みであり、a)~e)のすべてに関わる。

II. 調査A

目 的

諸井(1985)は、高校1年生を対象として孤独感と自己意識との関係を検討したが、その際、女子よりも男子のほうが孤独感が高いことを見出した。この性差について、諸井(1985)は、a)調査時期が高校入学という生活事態変化からほぼ1年経過している、b)男女ともほぼ全員が自宅通学者である、c)学力面では男女ともほぼ同水準にある、という点から、青年期中期では男子の孤独感が女子よりも高いという一般的結論の可能性を示唆している。高校入学による生活事態変化は、高校生活への適応を迫るとともに、青年期前期から中期への移行時期と重なっている。したがって、高校新入生の孤独感は、下宿生活者に比べ事態変化の連続性がある自宅通学者でさえも、特徴的な変化を示すかもしれない。

方 法

調査対象および調査の実施

名古屋市内にある県立明和高校 1 年生 2 クラスを対象に調査を実施した。一連の質問紙が、“高校生の生活意識調査” の名目で、1984 年 4 月中旬および 7 月上旬の 2 回、記名方式で実施された。a) 2 回の質問紙両方に回答している、b) 自宅通学者である、という条件を満たす 91 名を分析対象とした(男子 53 名、女子 38 名)。なお、2 測定時点をそれぞれ TimeA, TimeB と略記する。

質問紙の構成

両時期に用いた質問紙の構成は、大学生を対象とした調査(諸井, 1986)で用いたものとほぼ同じである。ただし、a) 教師のリーダーシップ認知に関する尺度を TimeA で実施した、b) 勉学に関する質問を設けた、という点で異なる。

1) 被験者の基本的属性： 性別、家族構成、現在のすまい(自宅、下宿)について訪ねた。

2) 孤独感尺度： Russell *et al.* (1980) による改訂 UCLA 孤独感尺度を用い、20 項目それぞれについて、“日ごろ” 自分が感じている程度を“たびたび感じる” から“けっして感じない” の 4 点尺度で評定させた。得点は、孤独感が強いほど高得点になるようにした(1 点から 4 点)。なお、項目の配列順の効果をなくすために、項目順が異なる 4 タイプの質問紙を用いた。

3) その他： 家族関係、高校内・外の親友関係、勉学状況、高校の雰囲気認知について尋ねた。また、TimeA では教師のリーダーシップに関する尺度、TimeB では Rotter の対人的信頼感尺度を実施した。本稿では、これらの評定結果については取り扱わない。

結果と考察

孤独感尺度の検討

91 名を対象に、改訂 UCLA 孤独感尺度の内的整合性を検討した。2 時点それぞれで GP 分析を行ったところ、すべての項目で 1% 水準で有意差が認められた(原項目 8 が TimeB で 1% 水準であった他は、すべて 0.1% 水準で有意差が得られた)。20 項目での α 係数を求めると、TimeA で .909 (男子 .885, 女子 .934), TimeB で .885 (男子 .879, 女子 .885) と十分に高かった。したがって、2 時点での 20 項目の合計得点をそれぞれ孤独感得点とした。

2 時点間の相関は .608 (男子 .603, 女子 .663, すべて $p < .001$) であり、本研究と同時期に実施した大学生の場合に比べ(.766, 諸井(1986)), 少し低かった

($CR=2.43, p<.05$)。

孤独感の変化

2時点における孤独感得点の条件別平均値を、Table 1 に示す。被験者内変数として測定時点 (TimeA , TimeB) , 被験者間変数として被験者の性 (男子, 女子) を用いて、測定時点×被験者の性の分散分析 (一括投入型回帰的分析法) を行った。交互作用のみが有意であり ($F_{(1,89)}=4.39, p<.05$; 性: $F_{(1,89)}=1.23, ns.$; 測定時点: $F_{(1,89)}=0.29, ns.$) , 女子よりも男子の孤独感が高い傾向が TimeB でのみ認められた ($F_{(1,89)}=4.17, p<.05$; TimeA: $F_{(1,89)}=0.01, ns.$)。平均値をみると女子の TimeB での孤独感の低減傾向がみられるが、測定時点間の差は男女ともに有意でなかった (男子: $F_{(1,89)}=1.45$; 女子: $F_{(1,89)}=2.98$, いずれも $ns.$)。

Table 1

孤独感得点の条件別平均値 — 高校生 —

	N	< 測定時点 >	
		TimeA	TimeB
男子	53	39.36(8.74)	40.68(8.97)
女子	38	39.21(10.80)	36.97(7.88)

() 内: SD

大学においては、一般的に日常的拘束が緩やかであり、自由に対人的行動を営むことができる。一方、高校においては、クラスを単位とするかなり拘束的な生活を過ごすことになる。したがって、高校新入生の場合、たとえ家族関係や入学前のネットワークが維持されていたとしても、高校での新たな生活事態への直面の影響がかなり強く孤独感に反映すると思われる。高校1年後期での孤独感の男女差をあわせて考えると (男子: $\bar{X}=40.65$; 女子: $\bar{X}=36.80$; 諸井(1985)) , 次のように推測できる。男子では、もともと孤独感の水準が高く、生活事態変化に伴う孤独感の高まりはもたらされず、この高水準は維持される。一方、女子では、もともと孤独感の水準は低く、生活事態変化に伴って孤独感が高まるが、変化への適応とともに本来の低い水準に回帰する。

ところで、Cheek & Busch(1981) の研究によれば、大学入学に伴う孤独感

の高まりとその後の低減がもともと内気な(shy)者でのみみられた。この知見に基づくと、もともと社会的技能に富む者には新たな生活事態への適応に伴う困難とその克服がみられないことになる。これは、本調査でみられた男女差の解釈と一致しない。

III. 調査B

目的

Gerson & Perlman(1979)は、“ここ2週間の状態”および“通常の状態”という2種の基準でUCLA孤独感尺度を評定させ、両評定の得点の高低に基づき、慢性的孤独者と状況的孤独者とを区別した。Shaver *et al.*(1985)は、“ここ数日間”および“ここ数年間”という基準で孤独感尺度項目(改訂UCLA孤独感尺度項目から8項目, Rubenstein & ShaverのNYU孤独感尺度項目から3項目)を評定させ、前者を状態-孤独感, 後者を特性-孤独感とした。これにならって、本調査では、“ここ2週間の状態”および“この1年間の状態”という基準で改訂UCLA孤独感尺度を評定させ、大学1・2年生の孤独感の変化を1年間にわたって検討する。また、諸井(1985,1987,1989a,1989b,1990)は、孤独感と自尊心との間に負の関係があることを認めている。生活事態変化に伴って、自尊心がどのような変化を示すかもあわせて調べる。

ところで、追跡調査では記名方式で調査を実施せざるを得ない。しかし、記名方式では、“他者による承認を得るために社会的に望ましい方向に行動する傾向”, すなわち社会的承認欲求によって反応が歪められる可能性がある。Russell *et al.*(1980)は、改訂UCLA孤独感尺度の弁別的妥当性を検討する際、社会的承認欲求を含むいくつかのパーソナリティー次元を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、社会的承認欲求の孤独感評定への影響は認められなかった。しかし、この研究では記名・無記名についての明確な記述がない。諸井(1986,1989b)は、記名調査によって孤独感と社会的承認欲求との関係を検討したが、その関係は希薄であった。しかし、1年間にわたる同一尺度の実施は再検査効果をもたらすかもしれない(速水,1976)。本調査では、孤独感と社会的承認欲求との関係について、再度、調べることにする。

方 法

調査対象および調査の実施

静岡大学の教養部で筆者の“心理学”を受講している1・2年生を調査対象とした。質問紙は、“青年の行動・意識”調査の名目で、1987年度から1989年度まで（4月から翌年の1月）、それぞれ5回、記名方式で実施された。調査実施日と各測定時点での質問紙の構成をTable 2に示す。なお、5時点それぞれをTimeA, TimeB, TimeC, TimeD, TimeE と略記する。

Table 2

調査実施日と質問紙の構成

		— 測定時点 —				
		<TimeA>	<TimeB>	<TimeC>	<TimeD>	<TimeE>
実施日	1987年度	4・23	7・2	10・8	12・10	1・21
	1988年度	4・21	7・7	10・13	12・8	1・19
	1989年度	4・27	7・6	10・19	11・30	1・25
短期的孤独感尺度	①	①	①	①	①	
長期的孤独感尺度	②	②	②	②	②	
自尊心尺度	③	③	④	⑤	③	
社会的望ましさ尺度		④				
対処方略項目尺度			③			
原因帰属項目尺度				③		
原因次元尺度				④		

○内の数字：測定順

3年間を通して、578名が少なくとも1回は質問紙に回答した（1987年度191名、1988年度193名、1989年度194名）。本調査では、居住状態に応じて、被験者を次の3群に選別した。自宅通学者である自宅群、大学の寮に居住する大学寮群、下宿やアパートに居住している下宿群の3群である。a)5時点すべてで質問紙に回答した、b)5時点通じて居住状態（自宅群、大学寮群、下宿群）に変化がみられなかった、という条件を満たす392名を分析対象とした。対象者の内訳をTable 3に示す。

Table 3

調査対象者の内訳

	<男子>		<女子>	
	1年	2年	1年	2年
調査対象者総数	97	102	192	187
【5測定時点回答者】				
居住環境変化者	1	1	3	7

居住環境無変化者				
{ 自宅群	7	25	36	54
{ 大学寮群	6	0	31	6
{ 下宿群	48	40	70	69

質問紙の構成

各測定時点の質問紙は、a)孤独感尺度（短期的、長期的孤独感尺度）、b)自尊心尺度、および c)被験者の居住環境を含む基本的属性に関する質問を必ず含んでいるが、Table 2に示すような仕方で、社会的承認欲求、孤独に対する対処方略、および孤独感に関する原因帰属を測定する尺度も含めた。

1)孤独感尺度： 諸井(1989a,1989b,1990)と同様に、Russell *et al.*(1980)によって作成された改訂UCLA孤独感尺度の20項目を次の2基準で評定させた。まず、“ここ2週間の状態”という基準で20項目それぞれについて、“たびたび感じる”から“けっして感じない”の4点尺度で評定させた。次に、“この1年間の状態”という基準で同様に評定させた。前者を短期的孤独感尺度、後者を長期的孤独感尺度と呼ぶ。なお、孤独感が強いほど高得点になるようにした(1点から4点)。

2)自尊心尺度： Rosenberg(1979)の自尊心尺度(10項目)を用い、各項目が自分自身にあてはまる程度を“かなりあてはまる”から“ほとんどあてはまらない”の5点尺度で評定させた。自尊心が高いほど高得点になるようにした(1点から5点)。

3)社会的望ましさ尺度： 社会的承認欲求の高さを測定するために、Crowne

& Marlowe(1960)によって作成された社会的望ましき尺度(33項目)を用いた。それぞれの項目が自分自身の行動や気持ちにあてはまる程度を“かなりあてはまる”から“ほとんどあてはまらない”の5点尺度で評定させた。得点は社会的承認欲求が強いほど高得点になるようにした(1点から5点)。

4)その他： 孤独感に関する対処方略および原因帰属と孤独感との関係を検討するために、対処方略項目尺度、原因帰属項目尺度、および原因次元尺度を実施した。本稿では、これらの尺度の評定結果については取り扱わない(これらの尺度の詳細については、諸井(1989a,b,1990)を参照)。

なお、項目の順序効果をなくすために項目順序の異なるタイプの尺度を用いた。1)、2)の尺度では4タイプ、3)では3タイプである。ただし、孤独感尺度では2基準の評定でタイプが異なるようにした。

結 果

孤独感と自尊心

(1) 尺度の検討

392名を対象として、各測定時点ごとに両孤独感尺度および自尊心尺度の内的整合性を検討した。

1)孤独感尺度： 測定時点ごとに2つの孤独感尺度それぞれでGP分析を行ったところ、すべての項目において0.1%水準で有意差が認められ、いずれの時点でも2つの尺度での20項目は高い弁別性をもつといえる。次に、20項目での α 係数を全体および男女別に算出した。その結果をTable 4に示す。いずれの場合にもかなり高い α 係数が得られた。したがって、2つの基準で評定させた孤独感尺度それぞれでの20項目の合計得点を、短期的孤独感得点および長期的孤独感得点とした。

2)自尊心尺度： 測定時点ごとのGP分析の結果、すべての項目で0.1%水準で有意差が認められた。10項目での α 係数を全体および男女別にTable 4に示す。いずれの α 係数もかなり高かったので、10項目の合計得点を自尊心得点とした。

(2) 短期的孤独感と長期的孤独感との関係

各測定時点での2つの孤独感得点間のピアソン相関を、全体および性・学年別にTable 5に示す。いずれの測定時点でも、先行研究と同様に両者の間にはかなり高い正の相関が見出された。Z変換を用いて各測定時点間の相関値の平均相関値を算出し、男女差および学年差について検討したが、いずれも有意差

は認められなかった。

Table 4

各測定時点における短期的孤独感尺度,長期的孤独感尺度,および自尊心尺度の α 係数

	N		< 測定時点 >				
			TimeA	TimeB	TimeC	TimeD	TimeE
全体	392	短期的孤独感	.898	.908	.910	.913	.909
		長期的孤独感	.909	.918	.922	.925	.923
		自尊心	.821	.840	.822	.840	.855
男子	126	短期的孤独感	.909	.922	.912	.924	.929
		長期的孤独感	.917	.932	.933	.937	.934
		自尊心	.809	.858	.810	.824	.830
女子	266	短期的孤独感	.889	.897	.905	.903	.892
		長期的孤独感	.903	.908	.914	.916	.916
		自尊心	.827	.824	.825	.848	.868

Table 5

短期的孤独感と長期的孤独感との関係 — ピアソン相関 —

	N	TimeA	TimeB	< 測定時点 >			平均 ^A 相関値
				TimeC	TimeD	TimeE	
全体	392	.798	.820	.851	.856	.837	.834
男子	126	.785	.847	.877	.894	.877	.860
女子	266	.803	.798	.832	.827	.810	.814
男子 1年	61	.812	.779	.863	.872	.849	.838
2年	65	.783	.929	.878	.909	.896	.887
女子 1年	137	.778	.766	.780	.804	.802	.786
2年	129	.864	.851	.897	.867	.823	.862

すべて, $p < .001$

A:各測定時点の相関値を Z 変換し平均 Z 値を求め,平均 Z 値を相関値に再変換した。

(3) 2つの孤独感と自尊心との関係

2つの孤独感得点それぞれと自尊心得点との間の測定時点ごとのピアソン相関を、全体および性・学年別にTable 6に示す。いずれの測定時点でも、先行研究（諸井, 1985,1987,1989a,b,1990）と同様に中程度に高い負の相関が見出された。Z変換を用いて各測定時点間の相関値の平均相関を算出し、a)自尊心が2つの孤独感のいずれかと強い関係を示すか、b)孤独感と自尊心との関係の強さに男女差や学年差が認められるか、を検討したが、有意差はなかった。

Table 6

孤独感と自尊心との関係 — ピアソン相関 —

	N		< 測定時点 >					平均 ^A 相関値
			TimeA	TimeB	TimeC	TimeD	TimeE	
全体	392	短期的孤独感	-.485	-.495	-.516	-.469	-.487	-.491
		長期的孤独感	-.453	-.504	-.499	-.482	-.495	-.487
男子	126	短期的孤独感	-.560	-.557	-.549	-.582	-.580	-.566
		長期的孤独感	-.495	-.579	-.521	-.594	-.595	-.558
女子	266	短期的孤独感	-.474	-.511	-.560	-.451	-.473	-.495
		長期的孤独感	-.449	-.510	-.530	-.455	-.463	-.482
男子	1年	短期的孤独感	-.450	-.417	-.505	-.428	-.454	-.451
		長期的孤独感	-.431	-.516	-.490	-.435	-.544	-.484
	2年	短期的孤独感	-.663	-.636	-.557	-.707	-.671	-.649
		長期的孤独感	-.582	-.606	-.514	-.731	-.629	-.618
女子	1年	短期的孤独感	-.437	-.500	-.568	-.468	-.522	-.500
		長期的孤独感	-.424	-.518	-.515	-.485	-.487	-.486
	2年	短期的孤独感	-.520	-.524	-.549	-.427	-.421	-.490
		長期的孤独感	-.476	-.512	-.551	-.422	-.430	-.480

すべて、 $p < .001$

A:各測定時点の相関値をZ変換し平均Z値を求め、平均Z値を相関値に再変換した。

社会的承認欲求

(1) 尺度の検討

社会的望ましき尺度に関する最初のGP分析では2項目（原項目番号7, 27）が除かれ、残りの31項目でのGP分析ではすべての項目において0.1%水準で有意差が認められた。31項目での α 係数は.796（男子.778, 女子.799；男子1年.757, 2年.799；女子1年.788, 2年.810）であった。孤独感尺度や自尊心尺度に比べると若干低い、十分であるといえる。したがって、31項目の合計得点を社会的承認欲求得点とした。この得点の性・学年別平均値をTable 7に示す。性×学年の分散分析（一括投入型回帰的分析法；以下のすべての分散分析および共分散分析では、セル数が不均等であることを考慮して、この方法を用いた）を行ったところ、性の主効果のみが有意であり ($F_{(1,388)} = 10.42, p < .001$ ；学年: $F_{(1,388)} = 0.15, ns.$ ；交互作用: $F_{(1,388)} = 0.06, ns.$)、男子よりも女子の社会的承認欲求が強い傾向があった。

Table 7

TimeBにおける社会的承認欲求の条件別平均値 — 性・学年別 —

	男子	女子
1年	84.07(11.29) N=61	87.88(11.46) N=137
2年	83.26(12.30) N=65	87.68(12.08) N=129

() 内: SD

(2) 2つの孤独感と社会的承認欲求との関係

各測定時点での2つの孤独感得点それぞれとTimeBでの社会的承認欲求得点との間のピアソン相関を、全体および性・学年別にTable 8に示す。全体では、いずれの時点でも有意な負の相関が得られ、孤独感評定に対する社会的承認欲求の影響を認めることができる。しかし、性・学年別にみると、女子ではいずれにおいても有意な負の相関が得られているのに、男子ではほとんどの時点で有意な相関がみられない。したがって、男子では社会的承認欲求の影響が希薄といえる。ただし、Z変換を用いて各測定時点間の平均相関値を算出し、男女差と学年差について検討したが、有意差は認められなかった。

Table 8

孤独感および自尊心と社会的承認欲求との関係 — ピアソン相関 —

		< 測定時点 >					平均 ^A 相関値		
N		TimeA	TimeB	TimeC	TimeD	TimeE			
全体	392	短期的孤独感	-.314a	-.283a	-.255a	-.243a	-.255a	-.270a	
		長期的孤独感	-.279a	-.230a	-.271a	-.282a	-.267a	-.266a	
		自尊心	.215a	.203a	.205a	.195a	.238a	.211a	
男子	126	短期的孤独感	-.214c	-.158	-.135	-.156	-.165	-.166	
		長期的孤独感	-.181c	-.145	-.160	-.209c	-.168	-.173	
		自尊心	.170	.157	.201c	.190c	.219c	.187c	
女子	266	短期的孤独感	-.347a	-.331a	-.285a	-.265a	-.280a	-.302a	
		長期的孤独感	-.316a	-.252a	-.308a	-.303a	-.306a	-.297a	
		自尊心	.269a	.282a	.250a	.236a	.279a	.263a	
男子	1年	61	短期的孤独感	-.295c	-.186	-.143	-.187	-.070	-.177
			長期的孤独感	-.295c	-.248	-.179	-.286c	-.106	-.224
			自尊心	.211	.267c	.241	.087	.156	.193
	2年	65	短期的孤独感	-.182	-.180	-.161	-.151	-.267c	-.189
			長期的孤独感	-.063	-.064	-.167	-.166	-.243	-.141
			自尊心	.152	.087	.185	.298c	.277c	.201
女子	1年	137	短期的孤独感	-.320a	-.317a	-.240b	-.189c	-.214c	-.257b
			長期的孤独感	-.289a	-.226b	-.261b	-.236b	-.226b	-.248b
			自尊心	.240b	.280a	.171c	.164	.219b	.215b
	2年	129	短期的孤独感	-.376a	-.349a	-.333a	-.355a	-.345a	-.352a
			長期的孤独感	-.351a	-.288a	-.361a	-.383a	-.398a	-.357a
			自尊心	.301a	.285a	.337a	.322a	.351a	.319a

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

A:各測定時点の相関値をZ変換し平均Z値を求め、平均Z値を相関値に再変換した。

Table 11

5測定時点での短期的孤独感, 長期的孤独感, 自尊心, およびTimeBでの
社会的承認欲求に関する因子分析の結果

— 主因子法, 斜交回転後の因子パターンマトリックス^A —

	<全体>		<男子>		<女子>	
	I	II	I	II	I	II
短期的孤独感						
TimeA	.863	.026	.877	-.007	.832	.022
TimeB	.886	.026	.883	-.012	.872	.032
TimeC	.896	.024	.881	-.012	.881	.009
TimeD	.882	.015	.911	.029	.848	-.016
TimeE	.824	-.033	.844	-.056	.778	-.056
長期的孤独感						
TimeA	.823	.034	.829	.088	.830	.015
TimeB	.878	.014	.826	-.063	.899	.050
TimeC	.932	.026	.950	.024	.922	.029
TimeD	.882	-.023	.895	-.032	.867	-.022
TimeE	.876	-.031	.868	-.052	.880	-.015
自尊心						
TimeA	-.055	.801	-.051	.801	-.050	.800
TimeB	-.041	.856	.006	.864	-.097	.831
TimeC	-.025	.898	.092	.999	-.094	.842
TimeD	.047	.934	-.016	.893	.076	.950
TimeE	.039	.926	-.002	.880	.077	.962
社会的承認欲求						
TimeB	-.258	.086	-.091	.152	-.270	.135

因子相関	-.582		-.656		-.583	

A: 直接オブリミン法を用い, $\delta=0$ とした。

散分析の結果をTable 12および13に示す。ここでは、被験者の性と学年および孤独感の評定基準に関する効果のみに注目する。性と学年の主効果、および性×学年の交互作用が有意であった。この交互作用は、男女差が1年でのみみられ ($F_{(1,388)} = 12.33, p < .001$; 2年: $F_{(1,388)} = 0.27, ns.$), 学年差が男子でのみあることから ($F_{(1,388)} = 10.80, p < .001$; 女子: $F_{(1,388)} = 0.05, ns.$), 男子の1年の孤独感が高いことを示している。さらに、評定基準の主効果、および性×評定基準と学年×評定基準の各交互作用が有意であった。評定基準の主効果は、短期的孤独感のほうが長期的孤独感よりも高いことを示している。しかし、2つの交互作用は、この傾向が、男子でのみ認められ ($F_{(1,388)} = 8.12, p < .01$; 女子: $F_{(1,388)} = 0.66, ns.$), さらに1年でのみ現われている ($F_{(1,388)} = 20.56, p < .001$; 2年: $F_{(1,388)} = 1.77, ns.$) ことを示している。

次に、社会的承認欲求得点を統制変数とする共分散分析を行った。社会的承認欲求の有意な影響が認められたが ($F_{(1,387)} = 36.48, p < .001$), 先と同様な有意な主効果と交互作用が得られた。

Table 12

各測定時点における短期的孤独感得点、長期的孤独感得点、
および自尊心得点の条件別平均値 — 性・学年別 —

N	< 測定時点 >						
	TimeA	TimeB	TimeC	TimeD	TimeE		
男子 1年 61	短期的孤独感	42.02(10.20)	41.92(9.78)	41.69(9.36)	41.54(9.96)	42.10(9.41)	
	長期的孤独感	38.03(11.19)	40.02(10.52)	40.59(9.68)	41.41(10.56)	41.13(9.87)	
	自尊心	30.85(7.69)	30.54(7.15)	30.95(6.36)	30.54(6.61)	31.25(6.49)	
	2年 65	短期的孤独感	35.92(7.83)	35.18(8.26)	36.55(8.25)	37.26(8.90)	37.68(9.59)
		長期的孤独感	36.20(8.06)	35.75(8.80)	36.28(8.86)	36.46(8.96)	37.51(9.57)
		自尊心	33.63(6.14)	34.09(7.17)	33.20(6.40)	33.15(6.66)	32.77(7.32)
女子 1年 137	短期的孤独感	36.53(8.05)	36.25(8.52)	36.23(8.09)	36.87(8.42)	37.01(7.73)	
	長期的孤独感	34.07(8.54)	35.05(9.30)	35.94(8.83)	36.23(9.06)	37.64(9.02)	
	自尊心	31.20(6.55)	29.58(6.44)	29.87(6.43)	29.72(6.99)	30.38(7.16)	
	2年 129	短期的孤独感	35.95(7.88)	35.77(7.64)	35.39(8.16)	36.28(7.53)	37.05(8.00)
		長期的孤独感	36.55(8.18)	35.81(7.72)	36.22(8.11)	37.12(7.96)	37.27(8.09)
		自尊心	30.69(6.18)	30.29(6.34)	30.43(5.98)	30.33(6.13)	30.74(6.30)

()内: SD

Table 13

孤独感および自尊心に関する分散分析の結果：F値 — 全体 —

	孤独感 ^X	自尊心 ^Y
性 ^A	9.23b	7.53b
学年 ^A	7.16b	4.98c
性×学年 ^A	8.22b	2.88
評定基準 ^A	7.96b	****
性×評定基準 ^A	4.05c	****
学年×評定基準 ^A	16.30a	****
性×学年×評定基準 ^A	0.12	****
測定時点 ^B	7.71a	2.23
性×測定時点 ^B	0.34	1.90
学年×測定時点 ^B	1.31	2.28
性×学年×測定時点 ^B	0.65	1.23
評定基準×測定時点 ^B	4.98a	****
性×評定基準×測定時点 ^B	0.73	****
学年×評定基準×測定時点 ^B	7.78a	****
性×学年×評定基準×測定時点 ^B	2.83c	****

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$ A: $df=1/388$; B: $df=4/385$

X: 性×学年×評定基準×測定時点

Y: 性×学年×測定時点

Table 14

各測定時点における短期的孤独感得点, 長期的孤独感得点,
および自尊心得点の条件別平均値 — 居住環境別 —

	N		< 測定時点 >					
			TimeA	TimeB	TimeC	TimeD	TimeE	
男子1年	自宅群 7	短期的孤独感	47.71(11.47)	44.71(10.67)	44.00(10.61)	46.71(13.52)	44.00(12.03)	
		長期的孤独感	44.00(12.46)	40.00(9.76)	42.43(11.62)	44.71(15.84)	43.00(13.28)	
		自尊心	31.57(8.70)	35.86(5.40)	33.29(6.13)	30.00(7.19)	32.71(5.09)	
	大学寮群 6	短期的孤独感	47.00(8.39)	46.33(11.94)	44.67(8.76)	46.00(11.61)	45.00(9.80)	
		長期的孤独感	46.33(13.06)	45.17(10.93)	46.17(10.93)	46.33(8.38)	44.50(8.07)	
		自尊心	28.33(7.34)	28.83(7.52)	27.67(7.17)	28.50(6.06)	30.00(6.42)	
	下宿群 48	短期的孤独感	40.56(9.92)	40.96(9.38)	40.98(9.32)	40.23(8.98)	41.46(9.08)	
		長期的孤独感	36.13(10.20)	39.38(10.62)	39.63(9.19)	40.31(9.85)	40.44(9.62)	
		自尊心	31.06(7.69)	29.98(7.12)	31.02(6.26)	30.88(6.68)	31.19(6.75)	
2年	自宅群 25	短期的孤独感	38.12(7.79)	37.64(8.97)	39.96(7.68)	39.72(9.21)	40.20(9.31)	
		長期的孤独感	38.32(9.39)	37.72(8.87)	39.48(8.45)	38.52(9.11)	41.16(9.37)	
		自尊心	32.68(6.13)	33.44(7.60)	32.56(7.37)	33.40(7.28)	32.00(8.03)	
	下宿群 40	短期的孤独感	34.55(7.64)	33.65(7.49)	34.43(7.95)	35.73(8.45)	36.10(9.53)	
		長期的孤独感	34.88(6.91)	34.53(8.64)	34.28(8.61)	35.18(8.74)	35.23(9.09)	
		自尊心	34.23(6.14)	34.50(6.96)	33.60(5.78)	33.00(6.32)	33.25(6.91)	
女子1年	自宅群 36	短期的孤独感	35.00(8.26)	33.97(7.53)	34.14(7.04)	35.28(7.96)	36.28(8.45)	
		長期的孤独感	33.61(8.91)	34.31(9.13)	35.25(9.10)	35.53(8.84)	36.86(9.21)	
		自尊心	30.56(6.63)	29.86(6.90)	30.08(6.15)	29.31(6.77)	29.78(6.82)	
	大学寮群 31	短期的孤独感	38.32(6.74)	40.58(9.39)	39.03(7.57)	41.45(8.29)	40.52(7.45)	
		長期的孤独感	36.06(8.16)	37.84(9.66)	38.68(8.69)	40.10(8.04)	42.26(8.31)	
		自尊心	29.74(7.16)	27.16(5.89)	28.68(6.81)	29.19(7.51)	28.87(7.65)	
	下宿群 70	短期的孤独感	36.53(8.41)	35.50(8.01)	36.07(8.55)	35.66(8.10)	35.83(7.08)	
		長期的孤独感	33.43(8.50)	34.20(9.10)	35.09(8.63)	34.89(9.23)	35.99(8.63)	
		自尊心	32.17(6.15)	30.51(6.24)	30.29(6.43)	30.16(6.95)	31.36(7.07)	
	2年	自宅群 54	短期的孤独感	36.06(9.01)	35.39(8.13)	34.65(8.51)	36.72(8.02)	36.85(8.14)
			長期的孤独感	36.50(8.74)	35.30(7.64)	35.87(8.35)	37.11(8.53)	37.61(7.84)
			自尊心	32.04(5.99)	31.89(6.01)	31.54(6.16)	31.30(6.32)	32.52(5.85)
		大学寮群 6	短期的孤独感	35.17(6.55)	37.00(6.03)	37.17(8.89)	34.67(8.89)	37.17(11.70)
			長期的孤独感	35.00(8.17)	37.50(7.66)	36.67(6.77)	38.17(10.38)	34.67(7.84)
			自尊心	28.67(4.18)	27.00(5.25)	28.33(7.06)	30.00(6.23)	30.17(7.88)
		下宿群 69	短期的孤独感	35.93(7.09)	35.96(7.44)	35.81(7.89)	36.07(7.10)	37.19(7.65)
			長期的孤独感	36.72(7.83)	36.06(7.86)	36.45(8.11)	37.03(7.38)	37.23(8.38)
			自尊心	29.81(6.34)	29.32(6.45)	29.74(5.67)	29.61(5.94)	29.39(6.25)

()内: SD

②自尊心： 被験者の性×被験者の学年×測定時点の分散分析を行った。条件別平均値と分散分析の結果をTable 12および13に示す。ここでは、被験者の性と学年の主効果にのみ注目する。性と学年の主効果が有意であり、女子よりも男子で、1年よりも2年で、それぞれ自尊心が高いことを示している。

次に、社会的承認欲求得点を統制変数とする共分散分析を行った。社会的承認欲求の有意な影響が認められたが($F_{(1,387)} = 29.33, p < .001$)、先と同様な主効果が有意であった。

(2) 居住環境の効果

各測定時点における短期的孤独感、長期的孤独感、および自尊心に関する居住環境別平均値をTable 14に示す。また、TimeBでの社会的承認欲求の居住環境別平均値をTable 15に示す。

Table 15

TimeBにおける社会的承認欲求得点の条件別平均値 — 居住環境別 —

	< 男子 >		< 女子 >	
	1年	2年	1年	2年
自宅群	82.57(10.88) N=7	83.40(14.09) N=25	88.89(10.95) N=36	87.22(12.81) N=54
大学寮群	80.67(18.94) N=6	****	88.94(10.15) N=31	92.67(9.44) N=6
下宿群	84.71(10.35) N=48	83.18(11.22) N=40	86.89(12.30) N=70	87.61(11.74) N=69

()内：SD

1) 居住環境間の比較

居住環境によって、孤独感や自尊心の高さが異なるかを検討するために、性・学年別に分散分析を行った。人数を考慮して、男子1年についてはこの分析を行わず、男子および女子の2年では大学寮群を除いて行った。孤独感については居住環境×評定基準×測定時点、自尊心については居住環境×測定時点の分散分析をそれぞれ行った。なお、居住環境には、女子1年では3水準、男女2年では2水準が、それぞれ含まれる。これらの結果をTable 16に示す。ここでは、被験者の居住環境と評定基準に関する効果のみに注目する。なお、社会的承認欲求については、いずれのサンプルでも有意な居住環境の効果はなかった。しかし、孤独感と社会的承認欲求との相関を考慮して、各分析で、社会的承認

欲求得点を統制変数とする共分散分析も試みた。

Table 16

孤独感, 自尊心, および社会的承認欲求に関する分散分析の結果: *F* 値

— 性・学年別 —

	男子 2 年	女子 1 年	女子 2 年
【 孤独感^A 】			
居住環境	4.89(1/63) ^c	4.13(2/134) ^c	.04(1/121)
評定基準	.08(1/63)	4.04(2/134) ^c	5.35(1/121) ^c
居住環境×評定基準	.00(1/63)	1.73(2/134)	.01(1/121)
測定時点	1.97(4/60)	7.48(4/131) ^a	3.59(4/118) ^b
居住環境×測定時点	.72(4/60)	1.81(8/264)	.83(4/118)
評定基準×測定時点	1.43(4/60)	7.15(4/131) ^a	1.04(4/118)
居住環境×評定基準×測定時点	.95(4/60)	1.09(8/264)	.76(4/118)
【 自尊心^B 】			
居住環境	.34(1/63)	1.36(2/134)	5.29(1/121) ^c
測定時期	.74(4/60)	6.39(4/131) ^a	.75(4/118)
居住環境×測定時点	1.07(4/60)	1.81(8/264)	1.55(4/118)
【 社会的承認欲求^C 】			
居住環境	.01(1/63)	.53(2/134)	.03(1/121)

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

() 内: *df*

A: 居住環境×評定基準×測定時点

B: 居住環境×測定時点

C: 測定時点

①孤独感： 男子2年では、居住環境の主効果が有意であり、下宿群に比べて自宅群の孤独感が高い傾向が認められた。女子1年では、居住環境と評定基準の有意な主効果が得られ、大学寮群の孤独感が他の2群に比べ高く、長期的孤独感よりも短期的孤独感のほうが高い傾向があった。女子2年では、評定基準の有意な主効果があり、短期的孤独感よりも長期的孤独感のほうが高かった。

次に、社会的承認欲求得点を統制変数とする共分散分析を行った。女子1年と女子2年では社会的望ましさの有意な影響が認められたが($F_{(1,133)} = 14.10$, $F_{(1,120)} = 22.23$, いずれも $p < .001$)、男子2年では社会的承認欲求の影響はなかった($F_{(1,62)} = 2.51, ns.$)。しかし、いずれのサンプルでも、先と同様な主効果が得られた。

②自尊心： 男子2年と女子1年では、居住環境の有意な効果はなかった。女子2年では、下宿群に比べ自宅群の自尊心が高いことを示す居住環境の主効果が有意であった。

次に、社会的承認欲求得点を統制変数とする共分散分析を行った。女子1年と女子2年では社会的承認欲求の有意な影響が認められたが($F_{(1,133)} = 8.62$, $p < .01$, $F_{(1,120)} = 19.15, p < .001$)、男子2年では社会的承認欲求の影響はなかった($F_{(1,62)} = 3.32, ns.$)。しかし、いずれのサンプルでも、先と同様な主効果が得られた。

2) 居住環境別分析

孤独感や自尊心の時間的変化を、居住環境ごとに検討した。人数を考慮して、男子1年では下宿群、男子2年では自宅群と下宿群、女子1年では3群すべて、女子2年では自宅群と下宿群を、それぞれ分析対象とした。孤独感については、孤独感の評定基準×測定時点(1次, 2次, 3次, 4次)の分散分析を行った。自尊心については、測定時点のみを独立変数とする分散分析を行った。各測定時点の間隔が不均等であることを考慮して、測定時点の間隔を不等(1, 4, 8, 10, 12)とした。これらの結果をTable 17に示す。なお、女子1年の孤独感の変化をFig.1に表わした。

①男子1年： ここでは、下宿群のみを対象とした。孤独感では、評定基準と測定時点の1次傾向の主効果が有意であったが、これに関連する交互作用も有意であった。評定基準×測定時点の1次傾向の有意な交互作用は、長期的孤独感でのみ1次傾向が現われることを示している($F_{(1,47)} = 10.16, p < .01$; 短期： $F_{(1,47)} = 0.16, ns.$)。また、評定基準×2次傾向の有意な交互作用についても、長期的孤独感でのみ2次傾向が認められる($F_{(1,47)} = 5.93, p < .05$; 短期：

$F_{(1,47)}=0.07, ns.$)。評定基準×3次傾向の交互作用も有意であったが、下位検定では有意でなかった(短期： $F_{(1,47)}=1.61$ ；長期： $F_{(1,47)}=0.76, ns.$)。これらは、TimeA では長期的孤独感に比べて短期的孤独感のほうが高いが、TimeB 以降では長期的孤独感の高まりによってその差が縮まることを示している。自尊心については、何の有意な効果も認められなかった。

②男子2年： 自宅群および下宿群のいずれでも、孤独感および自尊心ともに、何の有意な効果も見出されなかった。

Table 17

孤独感および自尊心に関する分散分析の結果：F値 — 居住環境別 —

	<男子1年>		<男子2年>		<女子1年>		<女子2年>	
	下宿群	自宅群	下宿群	自宅群	大学寮群	下宿群	自宅群	下宿群
	df=1/47	df=1/24	df=1/39	df=1/35	df=1/30	df=1/69	df=1/53	df=1/68
【 孤独感^A 】								
評定基準	6.88c	.09	.03	.07	1.78	9.39b	2.28	3.13
測定時点 ^C								
1次傾向	5.19c	3.71	2.02	7.04c	15.60a	2.31	2.16	1.49
2次傾向	1.22	.92	2.89	2.56	.05	.26	7.04c	2.53
3次傾向	2.67	.18	.31	.06	1.25	.02	.60	.04
4次傾向	.01	1.28	.49	.00	2.42	1.82	3.61	.00
評定基準×1次傾向	9.86b	.01	3.98	3.00	5.33c	10.74b	.68	.13
評定基準×2次傾向	7.41b	2.87	.40	2.89	1.78	.25	.00	.04
評定基準×3次傾向	.18	1.96	.55	.73	.05	3.58	.74	2.82
評定基準×4次傾向	4.42c	.67	.04	1.17	3.31	.00	3.05	.18
【 自尊心^B 】								
測定時点 ^C								
1次傾向	.39	.39	1.93	1.19	.01	3.54	.00	.09
2次傾向	2.53	1.31	.09	.37	4.50c	27.93a	3.48	.01
3次傾向	1.76	.00	1.39	.02	8.58b	.01	1.95	1.49
4次傾向	1.22	1.29	.22	2.00	.14	1.41	.66	.20

a: $p<.001$; b: $p<.01$; c: $p<.05$

A: 評定基準×測定時期<1次傾向, 2次傾向, 3次傾向, 4次傾向>

B: 自尊心: 測定時期<1次傾向, 2次傾向, 3次傾向, 4次傾向>

C: 不等間隔(1,4,8,10,12)

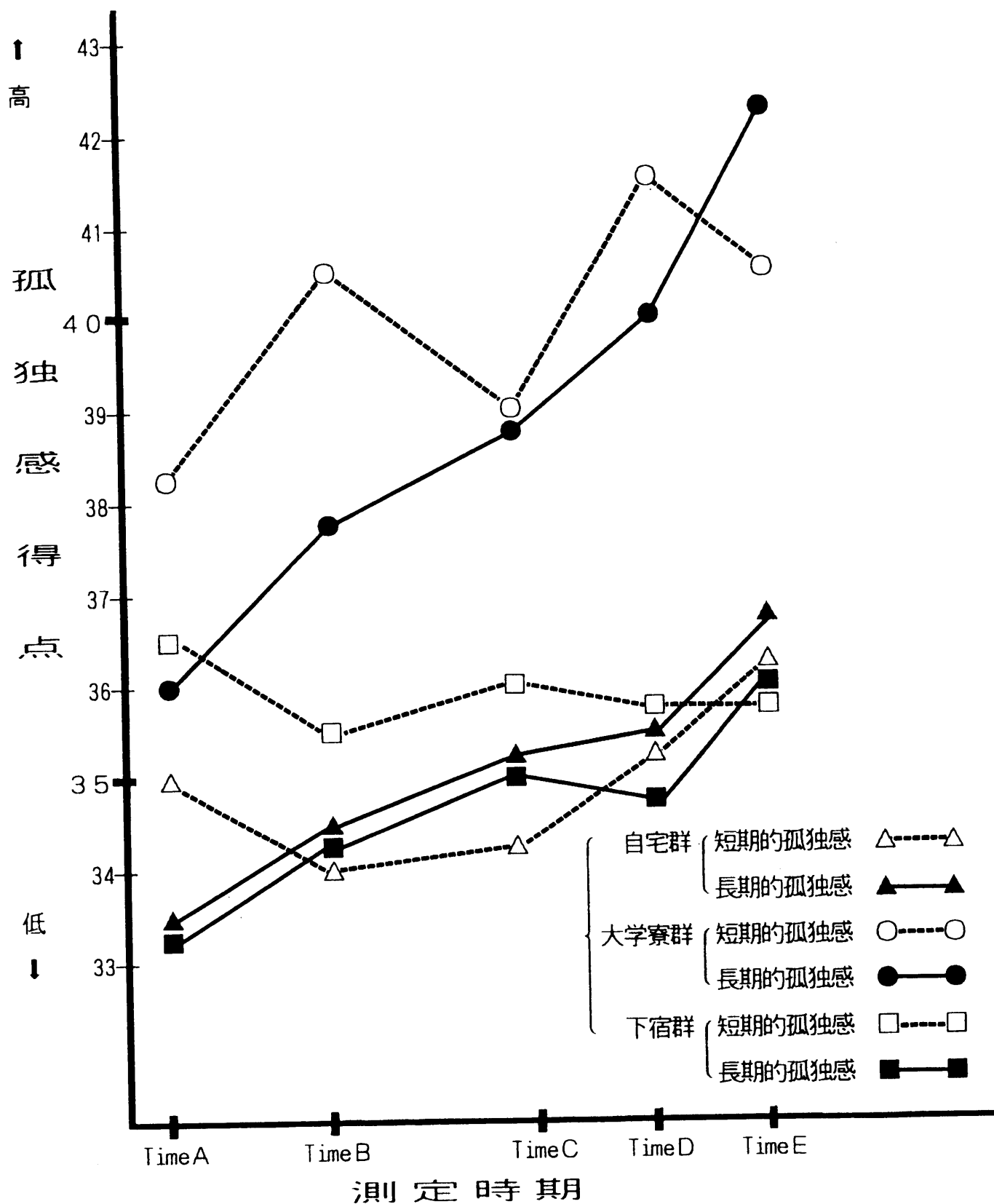


Fig. 1 大学1年-女子における孤独感の変化

③女子1年： まず，自宅群の傾向について述べる。孤独感では，測定時点の1次傾向が有意であり，時間とともに孤独感が高まる。自尊心では，何の有意な効果も得られなかった。

次に，大学寮群の結果について述べる。孤独感に関しては，測定時点の1次

傾向の主効果と評定基準×測定時点の1次傾向の交互作用が有意であった。これは、時間とともに孤独感が高まる傾向が長期的孤独感についてのみみられることを示している($F_{(1,30)} = 19.15, p < .001$; 短期: $F_{(1,30)} = 2.74, ns.$)。自尊心については、TimeBを谷とする測定時点の2次傾向と、TimeAとTimeDを頂点とする測定時点の3次傾向がそれぞれ有意であった。

最後に、下宿群の結果について述べる。孤独感をみると、評定基準の主効果と評定基準×測定時点の1次傾向の交互作用が有意であった。時間とともに長期的孤独感が高まるが($F_{(1,69)} = 10.12, p < .01$)、短期的孤独感ではそのような傾向はなかった($F_{(1,69)} = 0.43, ns.$)。自尊心をみると、TimeB、TimeC、TimeDを谷とする測定時点の2次傾向が有意であった。

④女子2年： まず、自宅群の傾向について述べる。孤独感では、測定時点の2次傾向が有意であり、TimeCで孤独感が最も低まるU字型傾向があった。自尊心については、何の有意な効果も見出されなかった。

下宿群では、孤独感および自尊心ともに、何の有意な効果も認められなかった。

考 察

短期的孤独感、長期的孤独感、および自尊心の相互関係

本調査では、孤独感について2基準で評定させた。しかし、先行研究(諸井, 1989a, 1989b, 1990)と同様に、いずれの測定時点においても短期的孤独感と長期的孤独感との間にはかなり高い正の相関がみられた。相関の大きさについての男女差や学年差が認められなかったことから、2つの概念の測定上の重複は安定して生じているといえる。本調査と同様な仕方で孤独感の区別を試みた Shaver *et al.*(1985) は、いずれの測定時点でも2つの孤独感の間の相関はあまり高くなく、特性-孤独感での測定時点間の相互相関が状態-孤独感での相互相関よりも高いことを報告している。したがって、Shaver *et al.* (1985)の被験者は孤独感の評定基準に敏感に反応しているが、本調査や先行研究での被験者は2つの孤独感の基準にあまり影響されなかったと推測される。

短期的孤独感および長期的孤独感それぞれの測定時点間の関係をみると、相互相関が高く、かなり高い一貫性を示した。学年・性別にみても、さらに居住環境ごとにみても、測定時点間の一貫性はかなり高かった。これらは、本調査と同様な仕方で6月から翌年1月の3回にわたって孤独感を測定した予備研究(諸井, 1989a, b)と、同じ傾向であった。また、因子分析においても2つの孤独

感の区別は生じなかった。長期的孤独感については、高い一貫性が期待されるが、短期的孤独感については、被験者がおかれている状況での一過的な出来事の影響によって、測定時点間の一貫性が低まると推測される。本調査の結果は、少なくとも青年期後期にある者の孤独感では個体特性成分の占める割合が大きいことを示していると解釈できる。平均値のうえではさまざまな変動がみられたことを考慮すると、次のように推測できる。個体特性成分としての孤独感が高い者は、日常的に生じる対人的出来事をネガティブに捉える傾向が高いため、一過的にも孤独状態に陥り易い。その結果、“ある時点で孤独感が相対的に高い（低い）者は別の時点でも孤独感が相対的に高い（低い）傾向にある”という仕方での変動が生じる。

ところで、短期的孤独感と長期的孤独感の高さに注目すると、評定基準の主効果がいくつかの分析で認められた。全体の分散分析、学年ごとの分析（女子1年、女子2年）、居住環境ごとの分析（男子1年の下宿群、女子1年の下宿群）で、2つの孤独感の平均値が異なることを示す主効果が現われた。とくに、居住環境ごとの女子の分析では、1年では長期的孤独感よりも短期的孤独感が高いのに、2年では短期的孤独感よりも長期的孤独感のほうが高いという対照的傾向を示した。これは、2つの評定基準による測定が孤独感の異なる2側面を反映していることを示唆している。つまり、1年では、生活事態変化に伴う孤独感の高まりが、一過的に捉えられ、短期的孤独感に影響するのに対して、2年では、1年次に経験した生活事態変化に伴う孤独感の高まりが長期的孤独感に影響している。

次に、自尊心について述べる。自尊心の場合も、測定時点間の相互相関が高く、高い一貫性がみられた。これは、自尊心が個体特性成分を反映しているといえ、平均値のうえでの変動も孤独感の場合と同様に解釈できる。

2つの孤独感と自尊心との関係についてみると、いずれの測定時点においても2つの孤独感と自尊心との間には中程度に高い負の相関があった。相関の大きさを比べても、自尊心が一方の孤独感と強く結びついているという傾向、学年差、あるいは男女差のいずれも認められなかった。因子分析の結果は、孤独感と自尊心が、相互相関が高いものの、2つの異なる概念であることを示している。ところで、先行研究（諸井,1985,1987,1989b）では、孤独感と自尊心とが負の関係にあるのに、女子に比べて男子の孤独感が高く自尊心も高いという矛盾した傾向があった。本調査でも、孤独感および自尊心とも被験者の性の主効果が得られ、平均値の方向が再び矛盾した方向にあることを示している。し

かし、孤独感の主効果は2つの交互作用によって限定されており、男子1年の孤独感が高いことを反映している。したがって、孤独感と自尊心との矛盾した傾向は、生活事態変化への適応過程において生じるとも考えられる。自尊心に対する生活事態変化の影響と思われるものが男子については認められないことから、孤独感に比べ状況的影響を被りにくい自尊心が男子では一貫して高く維持されているために、矛盾した傾向が現われると思われる。

次に、社会的承認欲求の影響について述べる。Russell *et al.*(1980)は、改訂UCLA孤独感尺度とMarlowe-Crowne社会的望ましき尺度の間に弱いが有意な負の相関を報告している。しかし、彼らは、社会的承認欲求を含むいくつかのパーソナリティ次元を説明変数として重回帰分析を行い、社会的承認欲求が孤独感と無関係であると結論づけた。Eysenck & Eysenck のEPQの下位尺度である虚偽尺度と改訂UCLA孤独感尺度との関係を調べた研究においても(Hojat,1982,1983; Saklofske *et al.*,1986)、孤独感評定におよぼす社会的承認欲求の影響は認められなかった。本調査では、孤独感評定および自尊心評定ともに、女子でのみ社会的承認欲求の影響が見出された。また、男子よりも女子の社会的承認欲求が高かった。諸井(1986)の研究では男子のみについて社会的承認欲求の影響を検討したが、男女大学生を対象とした予備研究でも(諸井, 1989b)、これらの傾向は得られなかった。Saklofske *et al.*(1986)の研究では、男女別に分析されたが、孤独感および虚偽尺度得点ともに男女差はなく、さらに両尺度間には男女ともに有意な相関が得られなかった。

Borys & Perlman (1985)によれば、男子は、性役割上、情動的弱さや苦悩の表明が許容されないため、孤独状態に陥り易い。しかし、本調査の結果からは、男子よりもむしろ女子のほうが社会的体裁を気にかけて孤独感と自尊心について評定していることになる。孤独感が一種の社会的烙印であるならば、社会的承認欲求の高い女子はそのような孤独状態に自らがあることを認めたがらないであろう。孤独感に関する直接的表現を含む自己ラベリング測度ではこの可能性が十分あると思われる。しかし、本調査で用いた改訂UCLA孤独感尺度は孤独感に関する間接的表現項目から成っていることを考えると(Borys & Perlman,1985)、この社会的承認欲求と孤独感との関係に関する男女差の解釈は曖昧になる。ただし、対人関係志向性の強い女子にとっては(Swap & Rubin,1983; 斎藤・中村, 1987)、間接的表現でもステートメントの内容が対人的であるために、社会的承認欲求の影響が生じるのかもしれない。

ところで、このような評定上の影響ではなく、社会的承認欲求の高い者が実

際に孤独感が低いことも考えられる。社会的承認欲求の高い者は、防衛的傾向を示す一方で、他者から好意をもたれようと努力する (Strickland, 1977)。この努力は対人関係の円滑化をもたらす。3つの社会的望ましき尺度を検討した Holden & Fekken (1989) によれば、他の2尺度 (Jackson 尺度, Edwards 尺度) が自己の一般的能力感覚を反映しているのに対して、Marlowe-Crowne 社会的望ましき尺度が対人的感性を表わしている。したがって、対人関係志向性の強い女子が、社会的体裁をふだんから意識し、そのため孤独感の低減につながる対人関係の円滑化をはかると解釈できる。

孤独感と自尊心の変化

まず、新たな生活事態への適応過程にある大学1年の孤独感についてみる。男子では、サンプルの偏りのため居住環境間の比較ができなかった。下宿群では、1次傾向の主効果が得られ、同時に得られた評定基準との交互作用をあわせて考えると、4月時点では短期的孤独感の高まりがみられ、その後、長期的孤独感がしだいに高くなり短期的孤独感と長期的孤独感との差が縮まるといえる。この変化は、諸井 (1986) が認めた変化と異なる。

次に、女子の傾向をみる。居住環境間の比較では、自尊心での差が認められなかったが、大学寮群の孤独感が自宅群や下宿群よりも高いという結果が得られた。これは、大学寮居住者のほうが大学生活に円滑に適應できるという予測に反する結果である。大学寮生活のポジティブな側面として、a) 不確定な出来事がもたらす不安の同輩との社会的比較による解消、b) 上級生による大学生活での準拠の提供、c) 社会的ネットワーク形成の活性化、などを考えた。しかし、本調査の結果は、大学寮という居住形式が孤独感を高めるネガティブな側面をもつことを示している。つまり、多人数での共同生活や1室に3・4人が居住するという形態が、孤独感につながる要因を生じているのかもしれない。ここでは、a) 混雑感 (crowding)、b) 対人的いさかい (interpersonal conflict)、という2つの観点から解釈してみる。

米国の大学寮では、1970年代前半から学生の増加に伴い2人用部屋に3人が居住するという状況が生じた。これを利用して混雑感に関するさまざまな自然実験的研究が試みられた。Mullen & Felleman (1990) は、これらの研究のメタ分析を試み、住み心地、対人的反応、保健センターへの来訪、一般的満足感に対する過密状態のネガティブな影響を検討した。本調査で対象とした大学寮では、大学周辺の下宿・アパートの少なさや臨時学生増募の影響などもあって、入寮率はかなり高い。かなり多数の学生が約20畳の部屋に4人単位で入居して

いる（寮定員：Y男子寮 276名，K男子・女子寮 516名；1987～1989年10月時点の入寮率：Y男子寮 82.6～84.4%；K男子・女子寮 88.8～92.6%）。したがって，Bickman *et al.*(1973)に従うと，ユニット内密度（部屋あたりの人数）および構造内密度（建物あたりの人数）の両方において，混雑感が生じやすい状況であるといえる。

山本(1986)は，人口密集（population density）がもたらす効果をポジティブおよびネガティブな側面に分けてまとめている。ネガティブな効果としては，刺激の過重，行動の拘束，資源の制約，空間についての受容と供給の不均衡についての認知，不本意な相互交渉，個人的空間の侵害を挙げている。また，ポジティブな側面とは，活性化作用，連帯行動の促進，資源利用の合理化である。本来，寮生活は，経済的負担の軽減とともに，これらの諸効果のうちのポジティブな側面を意図している。しかし，実際には，過密状況によって，これらの諸効果のうちのネガティブな側面が大学寮内での対人関係にさまざまな不全をもたらし，それによって孤独感が生起していると思われる。

大学寮のような居住形式は，さまざまな他者との出会いを可能とし社会的ネットワークの活性化をもたらす反面，対人的いさかきも経験させる。ふだん顔を合わせる可能性が高いために，いったん生じた対人的いさかきは，解決がなされなければ，かなりの苦悩をもたらすことになる。藤森(1989)は，男子寮居住大学生を対象に，対人的葛藤の解決パターンの分析を試みた。その結果，解決がコミュニケーションの促進－抑制次元と個別的－協調的解決次元とから成ることが見出され，葛藤に関する自分の欲求や意向の表明を抑制し個人的解決を図る抑制－個別型が全体の半数近くを占めていた。また，この抑制－個別型方略の使用は，問題を未解決のままにし，問題の長期化をもたらしていた。大学寮における混雑感の影響を検討した研究(Aiello *et al.*,1981; Reddy *et al.*, 1981)によれば，2人部屋に3人が居住しても，同室者との関係が良好であれば，混雑感やそれに伴うネガティブな効果も生じない。社会的支援のストレス緩衝効果に関する研究でも，対人的いさかきの重要性が示されている。Sandler & Barrera(1984)は，回答者の支援ネットワーク成員を，対人的いさかきの源泉でもある成員とそうでない成員とに分けた。いさかきを伴う社会的ネットワーク(conflicted network size)が大きいときにのみ，ストレスと身体症候との間に正の相関があり，このネットワークが大きいほど，不安，うつ，身体的不全がみられた。したがって，日常的に相互作用を強いられる同室者とのいさかきの統制がとりわけ重要であると考えられる。

女子1年それぞれの居住環境ごとの変化をみると、いずれの群でも時間とともに孤独感が高まる傾向がみられた。大学寮群と下宿群では長期的孤独感がしだいに高くなるが、自宅群では2つの孤独感ともに高まりを示した。これらの傾向は、大学寮群に比べ孤独感水準の低い下宿群や自宅群の場合も、生活事態変化への適応過程の中で孤独に陥っていくことを示している。

下宿群では、短期的孤独感が変動をあまり示さず、TimeC までに生じた一過的な孤独状態が評定時に勘案されて、長期的孤独感の上昇となったと思われる。つまり、生活事態変化に伴う孤独感が一過的に生じるものの、おそらく社会的ネットワークの形成によって極端な孤独化は生じない。

一方、自宅群では、初期のころには、家族関係や入学前からの社会的ネットワークの維持もあり、孤独感の高まりはないであろう。しかし、Hays & Oxley(1986)が認めたように、自宅通学者は、大学生活での同輩との交友が希薄になる傾向がある。したがって、自宅群の傾向は、大学生活の中での交友形成の遅滞によって、後に孤独に陥って行くことを示していると思われる。

本調査では、大学新生に対する対照群の意味も含めて、大学生活への初期適応期を通過した2年次の学生についても1年間にわたって孤独感を測定した。次に、この2年の結果を検討する。

居住環境間の比較では、女子では群差が生じなかったが、男子では下宿群よりも自宅群の孤独感が高い傾向が認められた。また、男子では、両群ともに孤独感の時間的变化はなかった。男子の傾向は、先述したように、自宅群の大学内での社会的ネットワーク形成の遅滞が続いていることを示している。逆に言うと、下宿生活者は、親による拘束なしに気ままに社会的ネットワークの維持と活性化を図ることができる。女子については、女子1年での自宅群の傾向から群差が予測されるが、2年の自宅群の孤独感の全体的高まりはなかった。しかし、孤独感の時間的变化をみると、自宅群ではTimeC を谷とする2次傾向があった。これは、自宅群の孤独感が安定していないことを示している。つまり、夏休みから秋休みにかけての孤独感の低下は、家族関係や大学外の交友関係によってもたらされたものと考えられる。

ところで、本調査では孤独感と同時に自尊心についても測定した。孤独感の変化に対応した自尊心の変化はなく、自尊心と孤独感とが異なる概念であることを示している。まず、居住環境間の比較をみると、女子2年でのみ居住環境の効果があつた。女子2年では、下宿群に比べ自宅群の自尊心が高い傾向があつたが、これは、自宅通学者が後期適応期に不利になるという考えに反する。自

宅通学者は、大学の同輩との社会的ネットワークにおける遅滞・抑制傾向を自己評価を高めることによって補償しているのかもしれない。居住環境別の分析では、男子1・2年および女子2年での自尊心の変化傾向はなかったが、女子1年については興味ある変化が認められた。自宅群では自尊心の変化がないのに、大学寮群と下宿群では自尊心の低下と回復傾向がみられた。これは、孤独感の変化と対応していない。つまり、生活事態変化の直後には自己評価は揺らがないが、夏休みにかけて自己評価の低下が生じる。しかし、下宿生活者の場合には、学年末には自己に対する肯定的評価感情が再び生じるが、大学寮群では、自己評価の揺らぎが継続するといえる。

IV. 今後の課題

高校新入生を対象とした調査Aでは、女子でのみ孤独感の低減傾向が認められ、男子の孤独感の高いままであった。この調査では、孤独感評定の基準を従来のまま用いているので、入学直後の女子の孤独感の高まりが一過的であり、男子の孤独感が慢性的にも女子に比べ高水準であるかは曖昧である。また、先行研究での知見（諸井,1985）も含め、青年期中期でも孤独感の男女差があると推測した。したがって、調査Bのように事態特性成分と個体特性成分との区別を意図した測定上の改善の試みとともに、青年期前期にある者の孤独感を調べることによって、孤独感の男女差がほぼいつごろから生じるかを今後検討する必要がある。

調査Bでは、大学1・2年生の1年間にわたる孤独感と自尊心の変化を測定した。平均値の変動のうえでは、短期的孤独感と長期的孤独感の区別は有意味であるが、相関のうえでは、かなり重複した概念であるといわざるを得ない。この原因の一つとして、測定方法を挙げることができる。ステートメントが同一であるにもかかわらず（2評定のステートメントの順が異なるにせよ）、連続して評定を求めると、内省する際に“ここ2週間”と“この1年間”との意識的区別が希薄になりがちなのかもしれない。したがって、別の日にそれぞれの基準に基づく評定をさせるほうがよいといえる。

孤独感の男女差については調査Bでも見出されたが、女子のほうに社会的承認欲求の影響が認められ、Borys & Perlman(1985)の解釈に反する結果が得られた。この問題は、孤独者に対する態度の男女差があるかどうかなども含め、検討すべきであろう。

孤独感の変化については、女子1年の大学寮生活者を中心にさまざまな興味深い傾向が認められた。しかし、自宅群、大学寮群、および下宿群を均等に得ることができなかつたため、不完全な比較しかできなかつた。また、授業を利用して1年間にわたって調査を行う場合、いわゆる受講状況が良好な学生のみがデータ対象として残ることになる。たとえば、大学生活の自由さを活かして授業をサボり交友活動に従事している者は、本調査には含まれない。このような者も含めると、大学寮生活者は別の傾向を示すかもしれない。したがって、授業利用以外の方法でデータ収集を試みることも必要と思われる。

ところで、本研究では、生活事態変化に伴う孤独感の分析を中心としたために、諸井(1986)が試みたような社会的ネットワーク状態との対応づけを行っていない。さらに、社会的ネットワークが当該の個人に何をもたらすかについては、とくに居住環境の影響を論じる際に推測を試みたが、実証的検討が必要といえる。Russell & Cutrona(1984)は、Weiss(1974)の考えにもとづき、社会的関係がもたらす6つの社会的欲求充足因 (social provision: 愛着, 社会的統合, 価値の再保証, 信頼できる味方, 指導, 養育の機会) を測定する尺度を開発した。この尺度は、大学入学に伴う孤独感との関連 (Cutrona, 1982), 大学生の社会的孤独感と情動的孤独感との関連 (Russell *et al.*, 1984), 出産直後の女性や老人センター在住者のストレス緩衝効果 (Cutrona, 1984; Cutrona *et al.*, 1986) を検討するために、用いられている。生活事態変化に直面する者が、一般的にどのような社会的欲求充足因の欠乏に陥り、居住環境による社会的欲求充足因の差異があるかを明らかにすることは、興味ある課題である。

< 付記 >

- 1) 調査Aでは、大学生を対象とした調査 (諸井, 1986) と同時期に実施したが未整理のままであったデータを分析した。したがって、調査Aは、生活事態変化に伴う孤独感に関する最初の研究 (諸井, 1986) の直接的な後続研究ではない。
- 2) 調査Bの1988年度分の実施にあたっては、昭和63年度静岡大学教育研究学内特別経費若手研究者研究奨励費を利用した。
- 3) 調査Bの実施と整理にあたって、佐野哲也君、渡邊ひとみ嬢 (社会学科昭和63年度卒業)、小林靖子嬢 (同平成元年度卒業)、岩本洋太郎君、および正村志保嬢 (同平成2年度4年生) らの協力を得た。
- 4) 本研究では、統計的処理のために、統計パッケージSPSS/PC+(V3.0J版) をNEC製PC9801-RA2上で利用した。

V. 引用文献

- Aiello, J.R., Baum, A., & Gormley, F.P. 1981 Social determinants of residential crowding stress. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 643-649.
- Bickman, L., Teger, A., Gabriele, T., McLaughlin, C., Berger, M., & Sunaday, E. 1973 Dormitory density and helping behavior. *Environment and Behavior*, 5, 465-490.
- Borys, S., & Perlman, D. 1985 Gender differences in loneliness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 63-74.
- Cheek, J.M., & Busch, C.M. 1981 The influence of shyness on loneliness in a new situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 572-577.
- Crowne, D.P., & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 349-354.
- Cutrona, C.E. 1982 Transition to college: Loneliness and the process of social adjustment. In L.A. Peplau & D. Perlman (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: John Wiley & Sons. Pp.291-309.
- Cutrona, C.E. 1984 Social support and stress in the transition to parenthood. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 378-390.
- Cutrona, C., Russell, D., & Rose, J. 1986 Social support and adaptation to stress by the elderly. *Journal of Psychology and Aging*, 1, 47-54.
- 藤森立男 1989 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, 4, 108-116.
- Gerson, A.C., & Perlman, D. 1979 Loneliness and expressive communication. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 258-261.
- 速水敏彦 1976 質問紙性格検査の再検査効果 教育心理学研究, 24, 57-61.
- Hays, R.B., & Oxley, D. 1986 Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 305-313.

- Hojat,M. 1982 Loneliness as a function of selected personality variables. *Journal of Clinical Psychology*, **38**, 137-141.
- Hojat,M. 1983 Comparison of transitory and chronic loners on selected personality variables. *British Journal of Psychology*, **74**, 199-202.
- Holden,R.R.,& Fekken,G.C. 1989 Three common social desirability scales: Friends,acquaintances,or strangers? *Journal of Research in Personality*, **23**, 180-191.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究, **56**, 237- 240.
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, **25**, 115-125.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, **26**, 151-161.
- 諸井克英 1989a 専門学校女子学生における孤独感と対処方略 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・人文学科研究報告), **39**, 21-42.
- 諸井克英 1989b 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, **29**, 141-151.
- 諸井克英 1990 大学生における孤独感と原因帰属 実験社会心理学研究, **30**, 41-52.
- Mullen,B.,& Felleman,V. 1990 Tripling in the dorms: A meta-analytic integration. *Basic and Applied Social Psychology*, **11**, 33-43.
- Reddy,D.M.,Baum,A.,Fleming,R.,& Aiello,J.R. 1981 Mediation of social density by coalition formation. *Journal of Applied Social Psychology*, **11**, 529-537.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Russell,D.,& Cutrona,C. 1984 The provisions of social relationships and adaptation to stress. *Paper presented at the American Psychological Association Convention*, Toronto, Ontario, Canada.
- Russell,D., Cutrona,C.E.,Rose,J.,& Yurko,K. 1984 Social and emotional loneliness: An examination of Weiss's typology of loneliness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1313-1321.
- Russell,D.,Peplau,L.A.,& Cutrona,C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence.

- 齋藤和志・中村雅彦 1987 对人的志向性尺度の試み 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 34, 97-109.
- Saklofske, D.H., Yackulic, R.A., & Kelly, I.W. 1986 Personality and loneliness. *Personality and Individual Differences*, 7, 899-901.
- Sandler, I.N., & Barrera, M. 1984 Toward a multimethod approach to assessing the effects of social support. *American Journal of Community Psychology*, 12, 37-52.
- Shaver, P., Furman, W., & Buhrmester, D. 1985 Transition to college: Network changes, social skills, and loneliness. In S. Duck & D. Perlman (Eds.), *Understanding personal relationships: An interdisciplinary approach*. Newbury Park, CA: Sage Publications. Pp.193-219.
- Strickland, B.R. 1977 Approval motivation. In T. Blass (Ed.), *Personality variables in social behavior*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Pp.315-356.
- Swap, W.C., & Rubin, J.Z. 1983 Measurement of interpersonal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 208-219.
- Weiss, R.S. 1974 The provisions of social relationships. In Z. Rubin (Ed.), *Doing unto others*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 山本和郎 1986 コミュニティ心理学 — 地域臨床の理論と実践 — 東京大学出版会.